

Èr ài qí yáng, wǒ ài qí lǐ
爾愛其羊，我愛其禮
なんじ そ ひつし お われ そ れい お
爾は其の羊を愛しむ、我は其の礼を愛しむうえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

今ではほとんど使われなくなりましたが、「告朔の餼羊」という言葉があります。古くからある風習や行事は、たとえ虚礼であっても、害がなければ残した方がよいという意味に多く使われます。また、虚礼化した慣習を揶揄する言葉として使われることもあります。

これも『論語』から出た言葉です。「子貢欲去告朔之餼羊 (Zǐ gòng yù qù gù shuò zhī xì yáng)」(子貢告朔の餼羊を去らんと欲す)〈八佾第三〉、というのがそれです。「朔」とは月初め、一日のこと。「告」とは告示すること。「餼羊」とは、神に供える羊の生贄のことです。もともと周代には、天子が年の終わりの月に、翌年一年分の暦を各諸侯に告げ、それを受けた諸侯はこれを祖廟に収め、月の初めごとに、その月分の暦を取り出して民に告示するという決まりがありました。これは最盛期の周代に行われた重要な儀式の一つでした。その際、各諸侯の祖廟に羊の生贄を供えました。これが「告朔の餼羊」です。

今日私たちが使っている暦は、1582年、ローマ法王グレゴリウス13世が定めたグレゴリオ暦がもとになっています。これは太陽暦と呼ばれるものですが、古代中国では太陰暦が中心でした。太陰とは月のことで、月の満ち欠けによって一か月を割り出すので、月を定めるのは比較的簡単です。これを12回繰り返すとほぼ1年になるので、年を定めるのもまた容易です。ただ、一日の長さは日の出から日没までが基準になっていたので、太陽暦一年の総日数365日余りと太陰暦一年の総日数354日余りととの間に10日余りのずれが生じます。そこで、このずれが30日前後に達すると、閏月を設け、その1年を13か月として調整を図ります。

更に、これに太陽暦に基づいた二十四節気を加

え、農作業に支障をきたさないようにしました。これが古来中国の伝統的な暦法で、中国では農曆と呼ばれています。この暦法は日本でも取り入れられ、明治初期までは一般に行われていました。これを太陰太陽暦と言います。

孔子が生きた周代でもこの太陰太陽暦が使われていました。ただ、二種類の暦を調整しながら使うには、複雑な計算を必要とします。古代社会では、民族により、地域により、さまざまな暦が使われていました。周代の中国は多数の部族国家の連合体で、これを周王朝が束ねていました。一つの王朝の暦が、広い地域で行われるということは、王朝の権威が、そこまで及んでいることの証左でもあります。したがって暦制定の儀式は天下を束ねる上で、極めて重要な意味を持っていました。

しかし、孔子が生きた春秋時代には王朝の権威が衰え、群雄割拠が始まっていました。「告朔の餼羊」も形だけのものとなり、王朝行事としての意味を失っていました。そこで、この形骸化した儀式を廃止するよう提言したのが、子貢でした。

これに対して孔子は次のように答えました。「賜也！ 爾愛其羊，我愛其礼 (Cì yě! Èr ài qí yáng, wǒ ài qí lǐ)」(賜や、爾は其の羊を愛しむ、我は其の礼を愛しむ)。賜(子貢の本名)よ。羊一頭を惜しんで、王朝存立の基本となる儀礼をおろそかにしてよいものか、と。

時代に合わなくなったものは捨て去ればよい。それも一理あるが、天下の秩序と安定の為には、残すべきものはやはり残さなければならない。現に失われつつある秩序と安定を取り戻すこと、その方が先決ではないか。これが孔子の考えでした。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)